

「ベトナム北部山岳に暮らすムオン民族 と取り組む環境保全型の村づくり」

特定非営利活動法人 Seed To Table 理事長

伊能 まゆ

皆さん、こんにちは。きょうはお忙しいところお集まりいただきありがとうございます。また、りそなアジア・オセアニア財団の皆さんにこうした貴重な機会をいただきまして本当にありがとうございます。きょうは、ベトナムの話をしていただきます。ことしからりそなアジア・オセアニア財団の皆様にご支援いただいている、実施している事業で、この事業は、いろいろ歴史があって今に至るのですが、やってきた活動の流れをさっとご説明しながら、ことしどういったことに取り組んでいて、来年どういったことに取り組むのかということをお話しさせていただきたいと思います。

ベトナムにも行ったことがあるかと思うので、お配りしている資料にもいろいろと情報がありますので、一つ一つは説明しないで、さっといかせていただきたいと思います。

ベトナムはコウさんのお話にもありましたが、東南アジアの一つの国で、中国とラオスとカンボジアと国境を接している国です。近年、ベトナムで働いているという、皆さんから、とても経済発展しているというふうに言われることが多いのですが、確かにマクロのレベルで見るとどんどん経済規模とか貿易の規模とかも大きくなっていますし、貧困層もどんどん減って順調なように見えるのですが、実は、ものすごい大農業国で、農業のことというのは、あまり日本のメディアの方にも取り上げていただけないかなと思っているのですが、人口の7割が農村に住んでいます。6割の人たち、58%か57%ぐらいの方たちが農業を営んでいる、農業で生計を立てているという国です。日本と比べると、断然その人数に違いというか、農業の大切さという意味では、多くの人の生計を支えているという意味で、大変大事な産業であります。

ほとんどの人たちは小規模です。今の日本の農家の皆さんの経営土地面積は約2ha弱ぐらい、北海道は別ですが、だいたいそれぐらいの感じだと思うのですが、ベトナムの北部はだいたい0.2haです。南部はメコンデルタという大きなデルタがありますが、そこでも

だいたい 0.5ha です。特徴的なのはみんな小規模であるということと、特にメコンデルタのほうは土地なし層がどんどん広がっているということです。

それと、ベトナムは農業をどういうふうに位置づけているかということ、やはり外貨を稼ぐ手段の一つとして重要だということで、非常に積極的に他国との自由貿易協定を結んでいます。主な輸出産業として、洋服をつくったり靴をつくったり、あるいは今だとサムソンの世界で 1 番か 2 番に大きい携帯電話の組立工場があるので、そういったものを組み立てて運んでいくということで、非常にほかの外から来た人たちとの提携というのをどんどん進めています、ベトナムの農産物をもっと外に出していきたいということもありまして、自由貿易を進めたいという意向があります。

ところが、本当に農業、農村の課題というのはどこの国も本当に大変で、経済発展しているような国ですと、物価が上がっていく割には農産物の値段は安いということで、農家の人たちの暮らしはあまりよくなっていないということが言えると思います。

それと、コウさんの話にもありましたが、やはりフレッシュなものを常に食べていますから、加工をしないのです。いつでもその辺りで新鮮なものが採れるので加工する理由がないわけです。日本は加工大国です。やはり冬が長いですし、米も 1 年に 1 回しかとれません。そういう状況の違い、環境の違いがあって、日本では地域ごとにいろいろな特色のある加工品が作られることにつながると思うのですが、ベトナムはどこに行っても本当にフレッシュなものがすぐ手に入るので、加工して保存するという発想がないわけです。だからいつまでたってもマンゴーだったらマンゴーだけを売る。マンゴーからピューレを作ったりジャムを作ったりという発想がなかなか出てこないのです。だから付加価値がつかないので、農産物の値段が安いし、農家の人たちも現金収入が上がらないということがあります。

それから、最近では気候変動、環境汚染ということで、ことしも実は、りそなアジア・オセアニア財団の池田理事長とそれから専務理事の方がいらっしゃってくださったのですが、ちょうど台風のあとで、村に通じる道が水没してしましまして、目的地まで行けなかったのです。そのあと、10 月にも大きな台風に見舞われて、大雨にも見舞われて、残念ながら亡くなってしまおう方が出ました。そういうことが、このところ頻繁に起こっているのです、これは本当に気候の変化だと言わざるを得ないです。そういったことが人々の暮らしを脅かしているということを私たちも現場に入っつづきに見ざるを得ないという状況です。

もう一つ、今、ベトナム社会でホットな話題は、日本の 70 年代とか 80 年代ぐらいにあったような、食品をめぐるスキャンダルです。日本の場合は、そのあとも幾つか大きいのがありましたが、今、日常的にベトナムの都市に住む皆さんというのは、どこで何を買って食べたらいいのかというのがものすごく不安だと、そういう状況にあります。

私たちが入っているところは、ホアビン省のタンラック郡というところで、北部の山岳地域になります。首都のハノイから車で約 3 時間のところに村があります。棚田を耕しながら小規模で家畜を飼って、森のものをうまく活用して暮らしているという人々です。

ベトナムは54の民族がいるという政府の公式発表ではありますが、そのうちの一つ、ムオン民族という人たちの故郷であります。いたるところに木でできたもの、森から採れたものを使った物というのが生活に根差しているわけです。ちょっと変わっているのは、写真右下ですが、これは何だか分かりますか。これは棺桶です。棺桶も木を切り抜いて。でも、今はもうこういう大きな木がなくなってきてしまったので、今は直接土葬しているそうですけれども、だいたいお年寄りがいる家というのは、家の軒下にこういうものが置いてあって、何年も置かないと使えないですから、自分が死ぬ前に木を切ってきて棺桶を作るわけです。

あとは竹とかラタンみたいなものを使った籠とか。こういうふうになんでも森とつながりがあるわけです。それから野生のランもたくさんありますから、そういったものも、村の人は岩場のほうからとってきて、家の軒先に吊るして楽しんだりしています。

子供たちがものすごく働き者で、しかもいろいろな知恵を継承している知恵者です。日本の大学生が遊びに来てくれて、大学で講義をすることもたまにあるのですが、こういったときに、やはり子供たちの受け継いでいる知恵のすばらしさとか、生活の知恵、彼らはお金はないかもしれませんが、お金でいろいろな価値をはかるではなくて、やはり生きる力で価値をはかっていった場合に、こういった地域の子供たちというのは、ものすごく価値がある、非常に生きる力があります。写真は、雑草みたいなものをとっているのですが、これは夕飯の品になります。田んぼの周りを歩くだけで、10種類ぐらいの食べられる葉っぱがありまして、そういうものをおじいちゃん、おばあちゃんたち、お父さん、お母さんと一緒に毎日歩きながらどんどん覚えていって、しまいには自分たちで採りにいけるようになるのです。

川や田んぼとか、そういったところにもたくさん貝がいたり魚がいたりする、こういうものも子供の仕事の一つです。それと、先ほどコウさんのマレーシアのお話の中で、2、3日たったら酒になっているという不思議なものがあるということでしたが、これも不思議で、タケノコをとって、山から汲んできた水を入れて3日ぐらい置くと、やはり発酵するのです。塩も入れないで、とてもおいしいタケノコの発酵物が出てくるのです。こういうものを保存食として食べています。あとこれは薬草、薬木、いろいろな植物のいろいろな部分を使って、これがまた世帯ごとにブレンドしているのですが、だいたい家族の人がどういった疲れがあるとか、肝臓が弱いとか、そういうことによって、それごとに集めてくる植物を変えて、家庭の味として定着しています。お客さんが来ると買って来た乾燥した緑茶を出してくれるのですが、家族はこれを飲んでいきます。

こういった在来種、ニンニクとか、箸でつまめる小さいニガウリの原種みたいなものもたくさん山に残っています。おかあさんたちと料理コンテストみたいなものがあると、ものすごくたくさん種類を作ってくれます。田んぼからネズミを捕ってきたとか、小川から小魚を捕ってきたとか、そういったものがたくさんあります。ここに乘っている魚醬と塩以外は全部この村で採れたものです。お米も採れたものです。こういうところで、在来

の植物が生態系あるいは地域の環境を守っています。人々の暮らしを守っていく上でも大切なので、こういう種を守る活動をずっとしています。

それと組み合わせて有機農業も、今、若者と一緒にやっているのですが、有機農業の技術を紹介して市場を開拓していくことをやっています。この中でもやはり地豚とか地鶏とか、その地域にずっと伝わっている在来種を大事にして、逆にそれを売りにしていくということで、そういった取り組みをしています。これもこの地域にしかない赤い実のザボンの一種です。こういったものも有機栽培で育てています。この人が若いお母さんなのですが、お姑さんとかそのお友達とか、若者が有機農業をやり出すと、お母さんたちも加勢してくれて、家族一緒に取り組んでいます。

それとこれは今年ご支援でやらせていただいた遺伝子組み換えに関する情報提供ということで、研修です。実は、こんな山奥ですが、シンジエンタという大きな種会社の作った遺伝子組み換えのトウモロコシの種が、2016年から出回るようになりまして、村の人は何となく怖いから、あまり使いたくないなというのがあったらしいのですが、会社の人が研修に来て、この種は収量もいいし、おいしいですよ、病気にもならないですよということで宣伝していくわけです。それはそれでいいんですが、遺伝子組み換え技術とは何ぞやということ、誰も体系的に教えてくれないというのがあったので、私どもの有機農業のネットワークの中で、そういったことにずっと取り組んでいる方に来ていただいて、遺伝子組み換え技術のいいところも悪いところも紹介した上で、あとは農家の皆さんが選択できるようにということをやっています。

ちなみに、有機農業のガイドラインで私たちがやっているのは、参加型保証制度（PGS）というのですが、そのガイドラインの中では、遺伝子組み換えの種は使ってはいけないことになっています。ですから、若者が今取り組んでいる有機農業の中では、遺伝子組み換えではなくて、在来の種をなるべく使うようにしています。

あと、やはり消費者と生産者だけの連携ということだけではなくて、私もシェフとかレストランとかと一緒に連携して、地元のいいものを紹介していこうと。やはり作ってくれる方が上手にきれいに見せてくれて、村の人が思ってもいないような調理の仕方をする、村の生産者の人たちもとても刺激を受けますし、食べてくださる皆さんもたいへん喜んでくださるということで、こういうイベントもコラボでやっています。

それともう一つは環境を守るということで、若者たちと一緒に、自分の村の環境問題を調べていこうとやっています。一つ大きな特徴としては、どこもこういう途上国の農村に行かれた方は、コウさんもおっしゃっていましたが、トイレが大変なのです。私たちはたまに行くから別にいいのですが、娘さんとかお母さんがいるところでもトイレがないのです。新築の家を建てたと自慢して、私を呼んでくれてお茶を飲みに行ったのですが、「トイレは？」と言うと「トイレはない」と言うのです。新築してもトイレはないのです。お金があるとかないとかではなくて、やはり意識なのです。

昔は人が少なかったもので、どこでトイレをしてもあまり害がなかったはずですが、今は

どンドン人がふえているので、やはりトイレがないとだめでしょうということで、例えばこの若夫婦の場合は、向こうの竹やぶが前のトイレだったのです。それで新しいトイレを作ったということです。

私たちは1万円かかるとしたら5000円しか支援しません。あとの貧困世帯が優先です。あとの5000円を出してまで、やはりトイレ欲しいなという人に参加してもらいます。そうするときれいに使うのです。モニタリングすると2年前、3年前にそういう支援でやったトイレというのはどンドン改造されてきれいになって、そういうふうに使ってもらっています。ある村は、私たちがこういう活動をする前は約60%の世帯にトイレがなかったのですが、この活動を始めて3年で、今は5%以下に減りました。ほかの人がやっていると真似をするようです。

あと、農薬のテストをしたりとか、それから水にいる生き物を調べてそれを標本にして、それを個体調査したりとか、これもチョウチョウです。村の若者が標本を作るので潰れてしまったりするのですが、それもしょうがないということでやっています。ハノイの大学の先生に一応学名を調べてもらっています。

こういったすばらしい地域なので、それを外の人に伝えるためのエコツーリズムの準備をしましようということで、これも若者が中心に村のいいところを探して、お母さんたちに聞き取りをしたり、地域の季節にあわせた村で採れるカニとか小さい魚とかを使ってどういう料理ができるかという、メニューを開発したりしています。

あと、たまにハノイの若者とか日本から高校生が来てくれたりするので、一緒に森歩きをして、1時間ぐらい歩いて葉っぱを拾ってきます。葉っぱを村の青年たちが用途ごとに分けるということをやっています。そうすると、木材用だったり、染め物に使うとか、薬用に使うとか、ひものようにして使うとか、いろいろ出てくるわけです。さっと行っただけでも50種類ぐらいの植物が見つかります。そういうことを見ると、若者たちもこの裏山はすごいんだということが数でわかってくるわけです。それで、日本から来た子たちは、同世代ぐらいの人が、こんなに森に関する知識を持っていて、何でもよく知っているということにまた驚くわけです。

こういったことをすることで、お互いが、自分が住んでいる地域の環境をどういうふう
に守っていこうか、守っていくことがとても大事なんだということをお互いに学んでくれる、そういった機会にしようということで続けています。

それから、これからの展開ですが、ベトナムはものすごくフェイスブックの使用率が高いのです。だから、フェイスブックが広報のツールとしてもものすごく有効です。村のいまどきの若者たちは、安くても高くても、いずれにせよスマホを持っています。でも全然使っていないくて、ゲームとかにしか使っていないのです。この間、みんなで計画を立てて、村のフェイスブックのページのアカウントをつくらうということで、ようやく先週できました情報発信をしています。集落ごとに、集落のきょうの様子とか、人々の暮らしとか農作業とか、こんなおいしいものがありますよというのを発信していくことをようやくして

います。

それと並行して、外から人が来てくれた時のお手洗いとかお風呂を修繕したりとか、有機農業のほうも高床式の家屋の軒先で豚をさばくのではなくて、と殺場の小さいものを作って、きれいな環境で肉の袋詰めをしたりできるようなファシリティを小さい規模の村で作っていて、村の人が管理できるようにしていきたいと思っています。

以上です。ありがとうございます。(拍手)